印度學佛教學研究第六十七巻第一号　平成三〇年十二月

金子大榮における『歎異抄』観

東　真行

金子大榮（一八八一―一九七六）は真宗大谷派のいわゆる近代教学を代表する仏教学者のひとりで、親鸞思想についての体系的な著作を多く遺し、特に親鸞の主著『教行信証』を生涯のテクストとして学究した。金子は一九一〇年代なかばより『教行信証』研究を本格化させ、親鸞の言葉を直接に読む「直接研究」という視座を提起した。すなわち、覚如や蓮如などの祖師、また種々の講義録の解釈を一旦保留して親鸞のテクストを直に読み解くという。そのため親鸞の著作ではない『歎異抄』は、しばらくは金子の思索の表面上にあらわれてこない。金子が『歎異抄』について思索を展開させ発表していくのは、自身が異安心に問われ、大谷大学での職を辞し（一九二八）、僧籍を離脱（一九二九年。一九四〇年に復帰）して以降である。その嚆矢となるのが、金子が校訂し、解題などを記した岩波文庫『歎異抄』（一九三一）である。

『歎異抄』は清沢満之や暁烏敏、近角常観らによって明治期以降、広く宣揚された。その影響下から生まれ、『歎異抄』の公汎な流布に決定的な役割を果たしたのが、岩波文庫『歎異抄』である。岩波文庫『歎異抄』は第二九刷（一九五八）の改版を経た現在も百刷を超えて読み継がれている。そこに付された金子による解題は、おそらくもっとも広く手にとられた『歎異抄』関連の文章だろう。しかし、広く手にとられたことは、必ずしも深く読まれたことを意味しない。本稿では、主として岩波文庫『歎異抄』における『歎異抄』理解を考察し、そこから金子の教学的、歴史的背景を読みとることもめざす。金子は『歎異抄講話』（一九三一―一九三二年頃の講話）、『歎異抄聞思録』（一九四七―一九五〇年の講話）などの著作も遺している。これらも参照し、二〇世紀における『歎異抄』解釈の一端を明らかにしたい。

第一に上記の著作において一貫する金子の『歎異抄』観を確認する。金子は岩波文庫の改版を「再版」[1]と呼び、また『歎異抄聞思録』を世に問う際にも以前に公刊した『歎異抄講話』に不満があるのではない旨を述べる。[2] たしかにこれらの書には共通する了解が認められ、それが金子の『歎異抄』観であるとひとまずはいえる。ただし、岩波文庫『歎異抄』

の解題を改版の前後で対照すると看過できない相違が認められることも事実である。そういった差異は『歎異抄講話』と『歎異抄聞思録』とのあいだにもみることができる。第二に、この相違点について考究する。

一　金子大榮における『歎異抄』観

はじめに著者と底本について確認する。『歎異抄』の著者については、現在ではほぼ定説となった妙音院了祥による唯円説を金子は踏襲する。金子は了祥の講義録を必読の古典として推奨し、了祥が異義をふたつに大別した了解、すなわち誓名別信計と専修賢善計の説についてよく言及する。また底本は、端坊本つまり永正一六年書写本である。

金子にとって『歎異抄』はまずもって直接なる書である。直に親鸞に面座した門弟の書であり、直截に信仰が語られている書ということである。このように直接であることを、金子は「感情」という言葉で受けとめ、あらわす。『歎異抄』を「感情」の書というのは、その書において親鸞の「宗教感情」[3]と「吾々の宗教感情の動き」[4]とが対面し、「同感」[5]が成立するという意である。「感情」というと抽象的かつ曖昧とした印象を与えるが、しかし『歎異抄』そのものが親鸞と唯円の対面における安心表白の語録として成就したように、読む者にとって『歎異抄』の文言は自らの心身にあてて感ぜられ、またそこで説かれることを宗とし行ずることがかなうという意において、確固としたものとして成就するという意味を有している。金子はこの意において「感情」の書として『歎異抄』を受けとめるため、ただ「知識」[6]を得ようと、この書に接することに対して一貫して批判的である。「感情」は、主に「知識」に対して用いられ、単に感情や実感の意ではないことに留意したい。

内容については『歎異抄』第一章を「親鸞の全著作を貫く信仰」[7]「親鸞の行信の全体を述べたもの……真宗の要旨」[8]として特に重んじている。第一章に第九章までの語録のすべては収斂して説かれてあり、また第一章は第十一章以降の異義を読むにあたっても指標となっていると金子は了解する。その第一章に語られる肝要を、第十二章の言葉「他力真実のむねをあかせるもろもろの聖教は、本願を信じ念仏をまうさば仏になる」[9]をもとに、金子はつぎのようにあらわす。「第一章は要するに、本願を信じ念仏して浄土に生るといふことである」[10]と。改版では「他力真実のむねをあかせるもろもろの聖教（教）は、本願を信じ（信）念仏をまうさば（行）仏になる（証）」[11]と教・行・信・証をあてて、「『教行信証』の説くところもこのほかにはない」[12]と述べている。「この簡単なる言葉を心にうけいれ、身につけることができれば、それで真宗の信者といわれるのである」[13]。このように金子は第一章を

『歎異抄』全体のみならず、『教行信証』に代表される親鸞の全著作にまで通底する文言として、あるいは「真宗の信者」であることの基底として了解している。

二　教権としての「知識」

ここで岩波文庫『歎異抄』の改版前後の相違を確かめておきたい。改版においては解題の編成が変更され、文章が大幅に書きあらためられている。どちらも本文は同じテクストだが、実際のところはやはり「再版」ではなく改版というべきだろう。

【初版　第一刷～第二八刷】

解題
一、作者
二、内容一般
三、親鸞の語録に就て
四、唯円の歎異に就て
異本
例言
歎異抄〔本文〕

【改版　第二九刷以降】

解題
一、作者
二、組織
三、教義
四、語録
五、歎異
六、異本
七、解釈書
例言
歎異抄〔本文〕

このふたつの解題における差異は様々にあるが、その顕著な一例として異義の了解を指摘できる。さきに述べたように、金子は了祥の誓名別信計と専修賢善計の説をふまえるが、このふたつの異義のうち、初版では改版よりも特に専修賢善計に重点が置かれている。金子は唯円の異義への歎きが「伝統的教権に依る理智によりてせられずして、純なる宗教感情によりてせられてある」[14]とし、専修賢善計について「教団的組織を有たうとする時には、兎もすれば陥らんとする思想」[15]であると述べる。

> 念仏は往生の行なりと聞いて、念仏の多少を計量せんとし、信心は涅槃の正因なりと聞いて、信心の正邪を理智的に規定せんとするものは、総べて専修賢善計の変形といふべきであらう。この意味に於て宗派を有ち教団を守らんとするものは、不知不識の間に一種の賢善計者となるやうである。[16]

金子は専修賢善計について言及する際、「伝統的教権」「教団的組織」「宗派」「教団」についての批判的な言辞を重ねる。ここでの「理智」とは、異義であっても真宗の教法と関わるものであるから、真宗の教法が「純なる宗教感情」にもとづく智慧であることをあらわして、「知識」としばらくは区別しているのだろう。しかし「理智」は教法と関わるゆえに深い執われを生みもする。初版では、真実を説き伝えるための教団が「理智」に執われることへの厳しい批判が加えられて

いるといえる。そして、このような異義理解の背後には、自身が異安心に問われ、僧籍を返上せざるを得ない状況に追い込まれたということへの悲嘆があると考えられる。

吾々の宗教感情の動き、機微とでも申しませうか、まあ一つちゃんと信仰が知識化してしまつた様なものでない、未だ知識にならざる以前の感情の動きと云ふものがよく『歎異抄』に出て居ります。[17] かう云ふ言葉を使つてよいか悪いか知りませんけれども、『歎異抄』の上には宗旨と云ふものの成立たない以前の宗教感情が流れて居る。宗旨と云ふものも一つの意味をもつたものであります。……『歎異抄』も無論さう云ふ宗旨と云ふものの中にあるのでありますけれども、それにも拘らずその宗旨以前の立場、未だ宗旨だ何だと云ふ名前の附かん以前の、その宗教感情を現して居る。真宗信者、真宗教徒だけが読んで解るのでない。真宗信者でも真宗教徒でもない本当の一切衆生が読めば、その胸に堪へる様なものが『歎異抄』の中にある。[18]

ここでは「理智」と等しい意味内容が「知識」「宗旨」という言葉であらわされている。この「知識」「宗旨」と対比されるのが「宗教感情」である。ここで「感情」は教法が組織のなかで権威と化す以前の宗教的感情とされている。そして、ある意味では、このように考える当時の金子にとって岩波文庫『歎異抄』の校訂は喜ばしき責務だったろう。まさしく岩波文庫という媒体は「真宗信者でも真宗教徒でもない」読者を射程として開かれているからである。真宗大谷派を離れた金子は、まさにそのような読者と「弟子一人ももたず[19]」という「同朋感情[20]」を同感せんとして、初版を世に送り出したと考えられる。

三　身の自覚とならない「知識」

前節では金子の岩波文庫『歎異抄』初版の内容と背景について読解を試みた。つぎに、改版で重要と考えられる点とその背景について確かめておきたい。さきに述べたように、金子は「知識」のために『歎異抄』を読むことに一貫して批判的であった。そういった「知識」批判の構図は改版においても認めることができる。

親鸞の教を伝えた唯円の眼に異義として映ったものは、真宗の法を知識化したものである。……その知識化は学解を主とするものと、制規を要とするものとの二派となった。それは恐らく「本願を信ずる」ことと、「念仏をまうす」ことを別視するところから起ったものであろう。「本願を信ずる」ことを、万人の承認すべき真理として学解しようとするものは、念仏を必須のものとしない。これに対して念仏の実行を尊むものは、その功徳を道徳的制規の実践に求めるのである。それは今日においても、知識人に受容された真宗と、実践を要求するものの真宗の別として見られることである。[21]

ここでは誓名別信計は「学解派」、専修賢善計は「制規派」

とあらわされて、共に「真宗の法を知識化した」異義であるとされる。改版では初版に比べると、第十一章が重く受けとめられ、「知識」という言葉も誓名別信計について、「知識人に受容された真宗」というかたちで用いられるなど、異義了解のうえでの強調点に差異を見出すことができる。金子の『歎異抄』に関する代表的な著作は、自らが異安心に問われた時期と、第二次世界大戦敗戦後の時期に発表されている。戦後、金子は「『歎異抄』に縋りつかしめられた[22]」「一昨年の八月十五日、敗戦といふことになりまして以後の自分の心持といふものは、再び『歎異抄』にかへりました[23]」と語り、『歎異抄聞思録』では「悪人正機」や「機の深信」を「『歎異抄』の精神[24]」として高調している。「『歎異抄』を貫ぬくものは、悪人正機の教へである[25]」、「『歎異抄』一部は機の深信のこころを明かにしようとせられたもの[26]」と金子は語りつつ、「闇商売[27]」など当時の状況についても言及している。『歎異抄聞思録』が語られた頃は、「生活するに当つて罪悪を犯さずにをれない[28]」状況だったのだろう。戦後を生きる金子の「同朋感情」がまなざしたのはすなわち、この状況下におかれた数多の、現実の人々であったといえよう。「現実には、摂取の光のうちにありながら煩悩悪障の断ちがたい身である。その現実を忘れては、尊い教えも観念に過ぎぬものとなるであろう[29]」。ゆえに改版における「知識」とは、当時の状況下にありながら、「煩悩悪障の断ちがたい身」という自覚が徹せられず、教法に対して第三者的にふるまい、単に『歎異抄』を「学解」して処理してしまうあり方を指し示している。

以上、金子大榮の『歎異抄』観を岩波文庫『歎異抄』を中心として確かめてきた。金子の『歎異抄』観は、金子を一貫する思索と、自身の置かれた状況、あるいは時代社会が機縁となって醸成された側面から成立していた。「直接研究」の態度をもって、直に文意にふれようとした金子が、様々な苦悩によりながら獲得した『歎異抄』観である。

1　改版、三六頁。　2　聞思録（上）、一一二頁。　3　講話（前篇）、二〇頁。　4　講話（前篇）、二七二頁。　5　講話（前篇）、二七頁。　6　初版、二〇頁。改版、四四頁。　7　初版、一四頁。　8　改版、一〇頁。　9　改版、六〇―六一頁。　10　初版、一五頁。　11　改版、一一頁。　12　同前。　13　同前。　14　初版、二六頁。　15　初版、二九頁。　16　初版、三二頁。　17　講話（前篇）、二七二頁。　18　講話（前篇）、二七六―二七七頁。　19　改版、五〇頁。　20　講話（後篇）、八九頁。　21　改版、二四―二五頁。　22　聞思録（上）、一一一頁。　23　聞思録（上）、一一六頁。　24　聞思録（上）、一四一頁。　25　聞思録（上）、一四〇頁。　26　聞思録（上）、二六六頁。　27　聞思録（下）、一〇一頁。　28　聞思録（上）、二九一頁。　29　改版、二七頁。

〈凡例〉

一、旧漢字を常用漢字におおよそあらため、踊り字は適宜、漢字、仮名で表記した。

一、岩波文庫『歎異抄』の引用では、初版は第二八刷（一九五七年五月）、改版については第一一四刷（二〇一七年一〇月）を用いた。

〈略号〉

初版＝『歎異抄』（第二八刷、一九五七）
改版＝『歎異抄』（第一一四刷、二〇一七）
講話＝『歎異抄講話』
聞思録＝『歎異抄聞思録』

〈参考文献〉

金子大榮校注『歎異抄』岩波書店、（一九五七）二〇一七
金子大榮『歎異抄講話（前篇）』萌文社、一九三四
金子大榮『歎異抄講話（後篇）』萌文社、一九三五
金子大榮『歎異抄領解　歎異抄聞思録（上）』在家仏教協会、一九九一
金子大榮『歎異抄聞思録（下）』在家仏教協会、一九八七

〈キーワード〉　金子大栄、歎異抄、岩波文庫

（大谷大学任期制助教、博士（文学））

新刊紹介

阿部泰郎・末木文美士　編

稀覯禅籍集　続　中世禅籍叢刊　第十二巻
（全十二巻・完結）

菊版・七八八頁・本体価格三六、〇〇〇円
臨川書店・二〇一八年三月